

メッセージアウトライン 創世記8:13～22「神の約束」

[13-14] 「六百一年目の第一の月の一日に、水は地の上から干上がった。ノアが箱舟のおおいを取り払って眺めると、見よ、地の面は渴いていた。第二の月の二十七日には、地はすっかり乾いた」

ノアは三度目に放った鳩が戻らなかった(12)ことによって地上が生物の居住性を回復しつつあることを知り、箱舟のおおいを取った。これは箱舟の屋根の一部と思われる。今までの箱舟の窓から見るきわめて限定されていた視界が開けて、地面が乾いている様子が確認できた。これはノアの生涯の六百一年目の第一の月の一日であり、その年の最初の日であった。この日を迎えたことによってノアは神による新しい始まりを意識したことであろう。さらに第二の月の二十七日には、地はすっかり乾いた。大洪水はノアの生涯の六百年目の第二の月の十七日に始まったが、翌年の第二の月の二十七日に完全に終わった。これは一年と十一日であるが、太陰暦(月の満ち欠けによって計算する)では一年は三百五十四日であり、それに十一日を足すと三百六十五日となり太陽暦の一年となる。多くの聖書注解者はこの見解を取る。すなわち大洪水は太陽暦で言えば一年間であったということになる。

[15-19] 「神はノアに告げられた。『あなたは、妻と息子たちと、息子たちの妻たちとともに箱舟から出なさい。すべての肉なるもののうち、あなたとともにいる生きものすべて、鳥、家畜、地の上を這うすべてのものが、あなたとともに出るようにしなさい。それらが地に群がり、地の上で生子、そして増えるようにしなさい。』そこでノアは、息子たち、彼の妻、息子たちの妻たちとともに外に出た。すべての獣、すべての這うもの、すべての鳥、すべて地の上を動くものも、種類ごとに箱舟から出て来た」

ここでは箱舟の中にいた一人ひとりの人間と彼らとともに箱舟にいた一匹一匹の動物を確認するような表現がなされている。彼らを箱舟の中に入れ、自ら舟の戸を閉ざされた神が今度は箱舟から出るように告げられた。ノアは地の面が乾いた時点で外に出ることもできたであろうが、彼は神が彼に告げられるまで箱舟の中にとどまっていた。彼は徹頭徹尾、神のみこころに従う人物であったことがわかる。地は大洪水によるさばきによってすべての生物が滅ぼされたが、再び彼らが生きるための条件が整い、箱舟から出た人間とすべての動物たちは新しい世界で生子、増え、広がることのできるのである。

[20] 「ノアは主のために祭壇を築き、すべてのきよい家畜から、また、すべてのきよい鳥からいくつかを取って、祭壇の上で全焼のささげ物を献げた」

ここは聖書で最初に「祭壇」について述べられている個所で、それは自然石を積み上げて作ったものであろう。ノアは洪水前の墮落した世界からの救いと、洪水から守られたことの感謝と、さらに新しい世界に住む子孫のために彼らの生涯が守られ、地が再び滅ぼされることがないようにとの祈りをささげたことであろう。そのささげ物は、「すべてのきよい家畜から、また、すべてのきよい鳥からいくつか」を取って祭壇の上ですべてを焼き尽くす全焼のささげ物であった。後代になるとこれは全き献身の思いをあらわすささげ物として知られるようになる。→レビ記1章

[21-22] 「主はその芳ばしい香りをかがれた。そして、心の中で主はこう言われた。

『わたしは、決して再び人のゆえに、大地にのろいをもたらさしはしない。人の心が

思い図ることは、幼いときから悪であるからだ。わたしは、再び、わたしがしたように、生き物すべてを打ち滅ぼすことは決してしない。この地が続く限り、種蒔きと刈り入れ、寒さと暑さ、夏と冬、昼と夜がやむことはない』」

ここでは大胆な擬人法が使われ、神がノアのささげ物を受け入れられたことによる、神と人との親しいコミュニケーションを身近に感じさせる表現となっている。「決して再び人のゆえに、大地にのろいをもたらしはしない」とは、今回と同じような大洪水ですべての生き物を滅ぼすことはしないという意味であり、人の心の悪をもはや問題とせず、さばくこともしないという意味ではない。神のさばきはいつの時代も厳格に悪を行う者の上に臨む。→箴言10:29,30,11:19,21,31

アダムが罪を犯して以来「人の心が思い図ることは、幼いときから悪である」が神は忍耐をもって人をご自身に立ち返るように導こうとされているのである。しかし、やがてノアの時のように神の恵みと忍耐の時は終わる。その時には、この世界は火によって滅ぼされることになる。→Ⅱペテロ3:3~7

22節では、種蒔きと刈り入れによって地が再び食物を産するようになるという祝福と、寒さと暑さ、夏と冬、昼と夜の規則的な継続性が約束されている。これは自然の営みの整然とした秩序が保証されるということである。しかし、これらは「この地が続く限り」であり、いつかこの地、この世界の終末がもたらされることになるという地の有限性もここには含まれている。

今は恵みの時、救いの時である。私たちはこの神の恵みをむだにしてはならない。
→Ⅱコリント6:1~2、エペソ2:1~9